



岩田 誠, 河村 満●編

『《脳とソシアル》発達と脳 —コミュニケーション・スキルの獲得過程』

書評者

小林 登 (東京大学名誉教授/チャイルドリサーチネット
(CRN, <http://www.crn.or.jp>) 所長)



本書は、東京女子医科大学名誉教授岩田誠先生と、昭和大学医学部教授河村満先生によって編集され、序論を含めて4章からなり、わが国の発達領域にかかわる脳研究の第一人者である18人の専門家により執筆された272ページからなるものである。

全体として、その構成を見ると、岩田誠先生のアイデアが光っているように見える。評者は折々、先生のお考えを伺う機会があったからそう思うのであろうか。脳からみたヒトの発達について先生が書かれた興味深い序論、さらには冒頭の「発刊に寄せて」、そして巻末の「あとがきにかえて」の河村先生との対談を読むと、それがよく理解される。すなわち、文化人類学的、さらには進化論的な発想で医学・医療問題をとらえようとする立場である。評者も、脳の働きを理解するには、それなしでは成し得ないと考えている。

本書の内容を見ると、Ⅰの「発達障害と脳」は、発達の脳科学的基本ばかり

りでなく、いわゆる自閉症スペクトラム、さらには成人の神経疾患に見られる特異な自閉症スペクトラムも取り上げて、治療教育も含めて単に臨床的にばかりでなく、認知神経学的にも論じている。

Ⅱの「コミュニケーション・スキルの獲得と脳」では、脳神経系の形態的、機能的な発達と高次の機能の生まれる過程から始まって、言葉の発達を中心に、コミュニケーション・スキルの発達と障害を論じている。障害としては、ディスレクシア、ひとまねの模倣障害としての自閉症スペクトラム、特殊な認知解離を示すウィリアムズ症候群、教育現場で問題になっている注意欠陥・多動性障害を取り上げ、これらの疾患の新しい視点からのとらえ方が理解される。

Ⅲの「コミュニケーションの広がり」と進化・個から集団へ」は、進化論的な立場から人間に最も近いチンパンジーに始まって、サル、そしてイヌを

取り上げ、いわゆる「社会脳」の進化と発達を論じ、本書を特徴づけている。特に、チンパンジーの子育てについては、われわれの子育てに示唆する点が多い。

評者は、書評のご依頼を受けて、「脳とソシアル」という発想の本がシリーズとして出版されることを知り、感銘を受けた。その第二弾としてのこの本も、発達を脳科学と関係づけて論じていて、格調高いものになっている。現在の医療の現場で問題となっている発達障害、特にコミュニケーション障害を原点に立って理解するために本書は有用である。医師や看護師ばかりでなく、ぜひ学生にも読んでいただきたいものである。

A5 頁272 2010年 医学書院刊
定価 3,780円 (本体 3,600円+税5%)
[ISBN978-4-260-00936-2]